

アクティブラーニング時代と学力研

バランスよく「アクティブラーニング」を

加印 いろえんぴつ 岸本 ひとみ

●アクティブラーニングって何？

文科省から出ている「アクティブラーニング」についての解説は、たくさんありすぎて、全部に目を通すのは難しいです。いろいろあたってみた中で、一番わかりやすかったのが、田村視学官（文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官）の著作物でした。中に、こんな記述があります。

Ⅱ言語活動特に小学校の先生方は熱心に取り組まれており、例えば問題解決的な学習や発見学習、体験活動やグループディスカッション、ディベートなどさまざまにあります。そういったものもアクティブラーニングに含まれると思いますし、もちろん言語活動もアクティブラーニングの範疇に含まれます。Ⅱ

例えば、算数の学習でも、習得したことを言語化して交流することがそれにあたる、

とあります。

私たちはこれまでも、1年生から「となりの席の人に、どうやってできたかを、お話ししよう。」のように、言語化したものを交流することを、当然のように授業の一場面と考えていました。算数で言えば、タイルやブロックを操作しながら、計算の仕組みを理解して、それを友だちに伝えることができると、理解がより深まるという指導をしてきたはずで。

また、グループでの話し合い活動でも、司会を立て、個々の意見を出し合い、それをまとめて、クラス全体の話し合いに生かすということも、中学年以上ではごく当たり前の光景です。今さら、声高に「アクティブラーニング」なんて、言わなくても、ずうっと実践を続けてきたことです。

そもそも、この言葉が出てきたのは大学教育の改革推進からだということは、よく知られています。講義中心、座学中心から、

学習者主体へと変えていかなければならない、という主旨で導入される学習形態のひとつです。だからこそ、「小学校の先生方は熱心に取り組まれており」となるのです。

●すべての場面でできるわけではない

文科省が「アクティブラーニング」の視点を取り入れた授業を、と提起すると、学習場面のすべてがそうでなければならぬ、というような指導や助言が横行することもあります。

田村視学官の書かれたものの中には、こういうくだりもあります。

Ⅱ暗記・再生型の指導が必要な場面もあるはずで。二項対立の発想ではなく、調和を保ちながら全体をバランスよく高めていただきたい。Ⅱ

「学力の基礎をきたえ」ないと、資料の内容が理解できません。漢字が読めなかったり、文章の読解力が拙かったりしたら、自分の意見が構築できません。そんな子どもたちが、「アクティブ」に学習できるとは思

えませぬ。

昨年来、あちこちの学校で「ここはアクティブラーニング」でないか、というような指導があつて、全員に習熟を図るために練習をする場面なのに、どう指導したらいいのかわからなくなつた、というような声をたくさん聞きます。

暗記・再生型の指導と、アクティブラーニングとを対立したものと捉えること自体が、理解と習熟をいったりきたりしながら、ひとつの概念を獲得していくという学童期の発達と矛盾するのではないかとも思います。

また、個人思考の場面と、交流して高め合う場面との両方がバランスよく配置されていることも、授業ではポイントになりませぬ。ひとりひとりが意見を持つという時間は、いわゆるアクティブラーニングではありません。「バランスよく」とは、そういうことも含めてなのでしよう。

●総合的な学習、生活科の創成期にも

20数年前、生活科ができた時も、同じようなことが話題になりました。数年後に、

学校現場が出した結論は、伝統的な低学年理科と社会科の垣根を取り払って、科学的なものの見方を指導すること、でした。

アサガオを育てて、色水を作り、酢を混ぜて色が変わると、子どもたちは「手品みたい。」と、驚きます。それがやがて、水溶液の性質の学習へとつながっていきます。

先日、6年生が、広島平和公園で英語の名刺カードを持って、海外からの訪問者に、堂々とインタビューしました。

「先生、グアテマラって、どの辺りにある国ですか。」

「中南米の国ですね。」

「すごく遠いですか。」

「そうですね。日本からだると24時間では着かないでしょう。」

「ふうん。そんな遠くからも来られてるんや。」

とつぶやく6年生を見て、「これがアクティブラーニングだよね。」と、同僚たちと話しました。総合的な学習での一場面です。

総合的な学習が導入されたときは、課題意識が持てない子どもたちは、課題意識を持った子どもたちの後をついていくだけで、

主体的な学びにはならなかった苦い経験もあります。それをもとに、それぞれの学校が、地域に合わせたいろいろな工夫を重ねたからこそ、意義ある学習活動が残り、はい回るものは消え去っていったはずですよ。

●忌避する必要はない

よくよく「アクティブラーニング的な視点」と書かれたものを読むと、自分の実践と重なる部分が必要あるはずですよ。一番わかりやすいのは、先行実施している学校の発表会に参加して、自分でもできそうな部分を見つけてくることですよ。

それをもとに、「私の実践のこの部分は、『アクティブラーニング的な視点』で、学習活動を進めています。」と、紹介すればいいですよ。子どもたちの実態に合わせて、実践を工夫し、教育していくのは私たちですよ。子どもたちの反応に違和感を感じたのなら、その指導法は合っていないんですよ。子どもたちの反応が悪いのに、無理にその指導法をとっても、結果は目に見えていませぬ。一番大切になければならぬのは、それではないでしょうか。